

Support of self-understanding to actively make occupational choices in intellectual disabilities education : Utilization of a working preparability pyramid

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 市川, 夢太, 村松, 舞子, 仲嶺, 春平, 高橋, 美佐紀, 香野, 毅 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027900

知的障害教育における
主体的な進路選択のための自己理解支援について
－職業準備性ピラミッドの活用－

市川夢太*¹、村松舞子*¹、仲嶺春平*¹、高橋美佐紀*¹、香野毅*²

(*¹静岡大学教育学部附属特別支援学校)

(*²静岡大学教育学部)

Support of self-understanding to actively make occupational choices
in intellectual disabilities education

Utilization of a working preparability pyramid

Ichikawa Yumeta.*¹ Muramatsu Maiko.*¹ Nakamine Shunpei.*¹ Takahashi Misaki.*¹ Kono Takeshi*²

Abstract

Due to the nature of disabilities, the high school of the special support school for intellectual disabilities focuses on guidance for employment rather than going on to higher education. The reality is that students aged 15 to 18 who have just entered adolescence must acquire the basic skills to work in a short period of three years and choose a career path from a limited number of career paths. Under these circumstances, in this study, I developed two tools, a readiness checker and an aptitude checker, with reference to the working preparability pyramid, with the aim of allowing students to independently choose their career paths during the three years of high school. Then, I will verify the results and issues of the lesson practice that supported the students' self-understanding.

キーワード：知的障害教育 進路選択 自己理解能力 職業準備性ピラミッド

I 問題の所在と目的

1 問題の所在

(1) 主体的に進路選択をするために必要な力は何か

文部科学省(2019)は、知的障害特別支援学校高等部の卒業者の進路状況について、平成30年度の時点で進学者0.4%に対して、就職者34.0%、社会福祉施設等入所・通所者60.4%と発表しており、特別支援学校高等部では、依然として進学する者よりも就労する者が多く、各校でも教育課程に産業現場等による実習(以下：現場実習)を多く取り入れるなど、就労に向けた指導が中心となっている。

生徒たちは高等部の3年間で進路を決定し、卒業の翌年から社会人としての生活が始まるが、ケースによっては、定着につながらなかったり、短期間で離職をしたりすることもある。地域の障害者就労・生活支援センター職員の話では、進路を自分で選んでいることが重要で、進路決定に家庭や教師の介入が多すぎるケースの離職が多いという。生徒自身が自分の進路を自分事として捉え、自分で考えて進路を選択できるような力を身に付けることが、高等部段階の指導に求められている。

才藤・古井(2018)による「知的障害特別支援学校高等部における作業学習・現場実習・進路指導に関する実態調査」では、知的障害のある生徒の進路選択肢について、「進路選択肢が乏しいことが課題」と挙げているが、それは「学校のみで改善していくには困難がある。」とも述べており、学校内での支援方法まで

は言及されていない。

しかしながら、とりわけ進路選択は一人一人の人生において、重大な局面であるので、学校内で取り組める進路選択支援にもっと焦点を当てた実践研究がなされるべきであると思われる。

そこで、学習指導要領や、本校の過去の研究を参照し、キーワードを精選することで、知的障害教育における主体的に進路選択をするために必要な力は何かに、明確にしたいと考えた。

(2) 学習指導要領より

平成31年(2019)2月に公示された特別支援学校高等部の学習指導要領では、職業科の知識及び技能の内容Aイ(ア)⑦「職業生活に必要とされる実践的な知識を深め技能を身に付ける」の解説の中で、進路選択について以下のように示している。

『適切な進路選択のためには、進路に関する情報だけでなく、これまでの生活経験や自己の適性などに基づいて、将来の社会生活の中で自己実現できる場を選ぶことが必要である。このことを踏まえ、自己の成長について考えるとともに、例えば、分担された仕事に必要な知識や技能などが自分に備わっているかなどの自己理解が図られるよう、「A職業生活」の「ア勤労の意義」と「C産業現場等における実習」を十分に関連付けて指導を進めることが重要である。』

このように、適切な進路選択のためには、単に進路先についての理解だけでなく、自分についての理解が

重要であると説明されており、主体的な進路選択には、「自己理解」が重要であると考えられる。

(3) 本校のこれまでの研究

本校高等部では、平成 18 年 (2006) から職業リハビリテーション (以下：職リハ) の考え方を取り入れ、主に作業学習や進路学習の授業づくりに関する研究を行ってきた。

平成 18 年 (2006) ～19 年 (2007) には、職リハに関する職員研修を通し、就労支援のキーワードを、①働くために必要なスキル、②セルフマネジメントスキル、③補完手段・補完行動、④システムティック・インストラクション、⑤トータルパッケージ、⑥ジョブコーチモデルの 6 点にまとめ、包括的に就労支援や授業実践を行った。

また、平成 20 年 (2008) ～27 年 (2015) には、特に②セルフマネジメントスキルに注目し、自己調整力を高めることを中心に研究を行った。

高等部では、「主体的な進路選択を促すために生徒の自己選択・自己決定を大切にする。」という教師間の共通理解のもと、「自分を知り変えていく力として自己認識を深める。」として実践を行った。ここで使用している「自己認識」という言葉は、指導要領で使われている「自己理解」に近いものと考えられる。

高等部だけでなく全校としても、図 1 に示す「社会的関係の中で自らを調整していくために必要な 3 つの力」の中で、「理解する力」「共有する力」「判断・工夫する力」の 3 つを挙げており、「理解する力」は「自己理解」を中核に、「他者理解」、「役割・活動理解」へ広がっていくものと設定している。

このようなことから、本校の過去の実践でも「自己理解」を重視して研究をしていた。

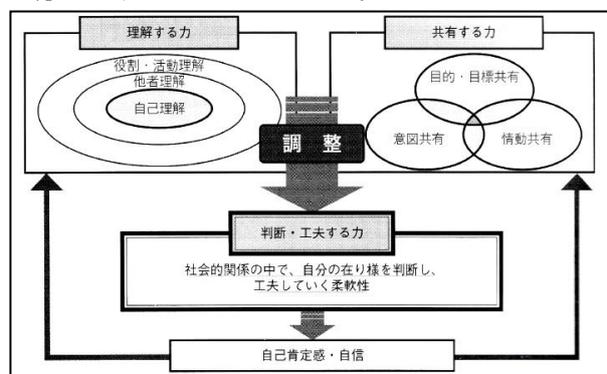


図 1 社会的関係の中で自らを調整していく力と 3 つの力

(4) 自己理解について

学習指導要領や、本校の過去の研究から、自己理解がキーワードだということが分かる。

しかし、その自己理解の構成要素や、とりわけ、いかに自己理解を高めていくかなど、具体的な指導方法については、いまだ深く研究がなされていない。

2 目的

主体的に進路選択をするために必要な力を「自己理解能力」と仮定し、働くために必要な力や自己の適性についての自己理解を深めるためのツールを開発し、実践を通してその効果を検証する。

II ツールの開発

1 本校の現状

現在、本校では、平成 28 年 (2016) ～令和 2 年 (2020) の 5 年間で、高等部の研究対象を作業学習や生活単元学習ではなく、各教科(特に職業科)に置き、育成を目指す資質・能力や各教科の見方・考え方に注目して研究を行っている。

学習指導要領の改訂に対応できるよう、これまで教科として独立していなかった職業科と家庭科を新設し、生活単元学習の中で扱っていた進路についての学習内容を職業科で扱うようになった。さらに、職業科を高等部の学習の柱として設定し、他教科とのつながりを明確にして、高等部 3 年間の教育課程を一目で確認できるグランドデザインを作成した。

進路指導においても、これまで扱ってきた職リハの考え方を見直し、現状に合わせて更新を図っている。作業学習でも、職リハの「働くために必要なスキル」(作業遂行能力、コミュニケーションスキル、セルフマネジメントスキル)という言葉は使わずに、現場実習の評価表を参考にしながら、働くために必要な力について生徒と一緒に考えている。

こうした背景の中、改めて主体的な進路選択に必要な力を整理しているのが現状である。

2 高等部生徒の実態

高等部の生徒の中には、作業遂行能力、コミュニケーションスキル、セルフマネジメントスキルのような社会的スキル以前に、服薬や睡眠、食事などの生活スキルに課題のある生徒も増えている。

3 年生段階でも健康管理の服薬や睡眠時間の管理が難しい生徒がおり、職リハの考え方だけでは捉えきれない実態に変化している。つまり、指導事項の内容や優先順位について検討が必要な状況である。

3 職業準備性ピラミッド

働くために必要な力の指導について検討を重ねる中で、職業準備性という言葉にたどり着いた。

職業準備性とは、独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構が発行している「就業支援ハンドブック実践編アセスメントとプランニング P.120」に示されている言葉である。そこでは、図 2 に示すように、「職業準備性ピラミッド」として、働くために必要な力が 5 段階に整理されている。

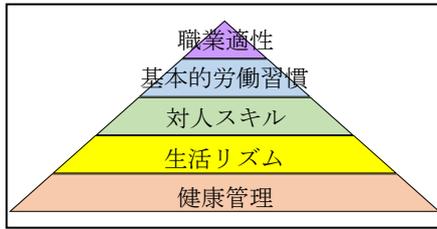


図2 職業準備性ピラミッド

安定した職業生活のためには、①健康管理、②生活リズム、③対人スキル、④基本的労働習慣、⑤職業適性の5段階の力が必要であり、特に土台部分が重要であることが示されている。

こうした力の捉え方は、本校生徒の実態に対応できるものである。指導の優先事項として、土台になる①健康管理や②生活リズムを示すことで、生徒の自己理解を深められると考えた。

4 ルーブリック評価

本校では、これまで「社会人の力・働く人の力チェッカー」(図3)というツールを使って、働くために必要な力を評価してきた。

これは、これまでの研究に沿って、「生活スキル」と「職業スキル」の2つの大項目で分類されており、「生活スキル」は「衣」「食」「住」の小項目に、「職業スキル」は「働く人の習慣」「作業態度」「対人関係」の小項目に分類されている。さらに、小項目ごとに5～7程度の評価規準が設けられ、それぞれABCの3段階の評価基準でルーブリック評価ができるようになっている。

「今の自分の「社会人」の力をチェックしてみよう！」

		名前	
		<衣>	<食>
服装	気温に合わせて着られる	言われた気温に合わせて着る	気温に関係なく服を着ている
洗濯	洗濯機を自分で使える	家族と一緒に洗濯機を使う	家族が洗濯している
洗濯物干し	一人で干せる	家族と一緒に干せる	家族が干している
洗濯物たたみ	一人できれいにたためる	形がくずれが一人でできる	家族がたたんでいる
アイロン	自分でしわをきれいにのほせる	家族と一緒にできる	家族がアイロンをかけている
衣類の収納	自分で分けて収納できる	家族と一緒に収納できる	家族が収納している

図3 社会人の力・働く人の力チェッカー

こうしたルーブリック評価は、生徒たちが実際に現場実習に行った時の実習評価表をもとにして作られたものである。現場実習評価表は、実習後の個別面談の際に、必要に応じて、生徒本人や保護者に提示し、評価について確認をする。

今回のツール開発においても、生徒自身や保護者、教師が、同じ評価基準のもと、客観的に評価を行うことで、自己評価と他者評価をすり合わせることができ、結果的に自己評価能力が高まると考え、ルーブリック評価の方法を取り入れて、チェッカーを作成することにした。

5 ツール1「準備性チェッカー」

「準備性チェッカー」(図4)とは、生徒の働くために必要な力(職業準備性)の全体像について自己評価を行うツールである。

職業準備性ピラミッドの5段階の大項目を細かく分類した小項目について、3段階の評価基準を設定し、ルーブリック評価をできるようにしている。準備性チェッカーによる生徒の自己評価と教師からの他者評価をすり合わせて、生徒の自己理解へとつなげる。

また、評価は、段階ごとに達成率を計算し、達成率に応じてピラミッドの形に色を塗ることで視覚化し、土台の安定感について理解しやすくしている。

準備性チェッカー			
学年	氏名	西暦	年 月 日
0 仕事への意欲について			
仕事への意欲	1 働く意欲が低い	2 働く意欲はふつう	3 働く意欲が高い
勤務日には	1 指示された仕事ができない	2 指示された仕事はできる	3 自分から仕事できる
達成率	←1の評価の数	←2の評価の数	←3の評価の数
合計	←1の評価の数×1	←2の評価の数×2	←3の評価の数×3
1 健康管理について			
出勤状況	1 3回以上欠勤・遅刻・早退がある	2 1回～2回程度欠勤や遅刻・早退がある	3 1回も欠勤・遅刻・早退がない
会事のリスム	1 3回以上会事をとらないことがあった	2 1～2回会事をとらないことがあった	3 毎日3食とった
栄養のバランス	1 栄養のバランスを考えずに食べている	2 栄養のバランスを考えて食べている	3 栄養のバランスを考えて食事の準備をしている
決められたときに病院へ行く	1 決められたときに行かないことが3回以上あった	2 決められたときに行かないことが1回あった	3 決められたときに病院へ行った
決められたときに薬を飲む	1 決められたときに飲まないことが3回以上あった	2 決められたときに飲まないことが1～2回あった	3 決められたときに薬を飲んだ
達成率	←1の評価の数	←2の評価の数	←3の評価の数
合計	←1の評価の数×1	←2の評価の数×2	←3の評価の数×3
2 日常生活管理について			
生活リズム	1 決めた時間に寝ないことが3回以上あった	2 決めた時間に寝ないことが1～2回あった	3 毎日決めた時間に寝た
体力	1 時間いっぱい働けないことが3回以上あった	2 時間いっぱい働けないことが1～2回あった	3 決められた時間いっぱい働くことができた
休日の過ごし方	1 遅刻・遅刻・早退・欠勤などが3回以上あった	2 遅刻・遅刻・早退・欠勤などが1～2回あった	3 十分に休息をとり、翌朝休まずに出勤できた
買い物	1 買い物は家族にしてもらった	2 誰かの支援を受けて買い物ができた	3 一人で買い物ができた
お金の管理	1 お金の管理は家族にもらった	2 家族の支援を受けて管理できた	3 一人で管理ができた
達成率	←1の評価の数	←2の評価の数	←3の評価の数
合計	←1の評価の数×1	←2の評価の数×2	←3の評価の数×3
3 対人スキル			
話を聞く	1 言葉も聞き直して分かる	2 1対1の指示を聞いて分かる	3 言葉指示を聞いて分かる
質問する	1 自分から質問ができない	2 時間はかかるが質問できる	3 すぐに質問できる
人に頼む	1 一人で難しいことも人に頼むことができない	2 時間はかかるが頼むことができる	3 すぐに人に頼める
人に頼まれる	1 頼まれても手伝ったり聞いたりできない	2 時間はかかるが手伝うことができる	3 すぐに手伝うことができる
難しいことは断る	1 難しいことも断ることができない	2 時間はかかるが断ることができる	3 すぐに断ることができる
長時間の作業のコントロール	1 作業や怒りを落ち着かせることができない	2 作業を受けて落ち着けることができる	3 自分で落ち着けることができる
注意をされたときに断る	1 自分から断ることができない	2 時間はかかるが断ることができる	3 すぐに断ることができる
指示に従う指示に従う態度	1 指示通りに行動できない	2 指示指示から外れてしまう	3 指示通りに行動できる
言葉遣い	1 丁寧な言葉をつかえない	2 上司に丁寧な言葉をつかえる	3 場面や相手に合わせた言葉遣いができる
達成率	←1の評価の数	←2の評価の数	←3の評価の数
合計	←1の評価の数×1	←2の評価の数×2	←3の評価の数×3

4 基本的労働習慣			
あいさつ	1 相手からされても返すことができない	2 相手からされれば返すことができる	3 自分からできる
返事	1 時でも返事をしない	2 返事を忘れることがある	3 自分からできる
言葉・連絡・組織	1 言葉掛けをしてもできない	2 辞めできないことがある	3 必要に応じて、自分からできる
正確性	1 言葉でない	2 辞め、正確性に欠けることがある	3 正確に作業ができる
集中力	1 集中が続きにくい	2 時々、集中が切れる	3 時間まで集中して仕事を続けられる
安全性	1 危険への対処ができない	2 教えられたことは守って対処できる	3 自分で危険を判断し対処できる
準備片付け整理整頓	1 言われないと難しい	2 周りの様子を見てできる	3 自分からきちんとできる
身だしなみ	1 整えられない	2 言葉を掛けられ整えられる	3 自分できれいに整えられる
時間	1 時間を守れない	2 1〜3回遅れることがある	3 自分で時計を見て行動できる
ルールとマナー	1 守れない	2 言われれば守れる	3 守って過ごせる
責任感	1 任せられた仕事を最後までやり通せない	2 どうにか責任を果たせる	3 責任を持って最後まで正確にやり通す
達成感	←1の評価の概	←2の評価の概	←3の評価の概
合計	←1の評価の概×1	←2の評価の概×2	←3の評価の概×3

5 職業適性			
仕事内容を知っている・できる	1 仕事内容を知らない	2 1つ〜4つの工程の仕事ができる	3 5つ以上の工程の仕事ができる
自分に合った仕事が見つかる	1 得意な仕事・苦手な仕事が見つからない	2 得意・苦手な仕事それぞれ1つは分かる	3 得意・苦手な仕事それぞれ3つ以上分かる
作業速度	1 必要とされる速度に達しない	2 ほぼ必要とされる速度である	3 必要とされる速度を十分に満たしている
変化への対応	1 作業変化への対応が難しい	2 支援があれば、作業変化に対応できる	3 作業変化に対応できる
達成感	←1の評価の概	←2の評価の概	←3の評価の概
合計	←1の評価の概×1	←2の評価の概×2	←3の評価の概×3

	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%	100%
5 職業適性	0	1	2	3	4~5	6	7~8	9	10	11	12
4 基本的労働習慣	0~1	2~3	4~5	6~9	10~14	15~18	19~23	24~27	28~29	30~31	32
3 対人スキル	0	1~2	3~4	5~7	8~11	12~15	16~18	19~21	22~24	25~26	27
2 日常生活管理について	0	1	2	3~4	5~8	7~8	9~10	11~12	13	14	15
1 健康管理について	0	1	2	3~4	5~8	7~8	9~10	11~12	13	14	15
0 仕事への意欲	0			1				2			3

<自分の進路画に合わせて色を塗ってみよう>

図4 ツール1：準備性チェッカー

6 ツール2「適性チェッカー」

「適性チェッカー」(図5)とは、自分にはどのような仕事の種類が適合しているのかを自己評価するためのツールである。

職業準備性ピラミッドの最上位にある「職業適性」は、本研究の目的である「主体的な進路選択」にとって最も重要な内容である。この「職業適性」については、ツール1の中でも評価するが、ツール1だけでは、様々な職業への理解を促すことができず、生徒の進路選択に迫ることは難しい。そこで、様々な職業に関する興味関心や、自分自身の得意不得意に関する自己理解を促す必要があると考え、ツール1「準備性チェッカー」とは別に、ツール2「適性チェッカー」を作成した。

① 清掃 せいそう					理由
やりがい	共感する そう思う	共感しない 思わない	どちらか わからない		
きれいな環境になったとき	そう思う	思わない	わからない		
周りの人に「ありがとう」と言われたとき	そう思う	思わない	わからない		
こみがいっぱいとれたとき	そう思う	思わない	わからない		
特に必要な力	得意 できそう	不得意 難しそう	どちらか わからない		理由
こみや汚れを見つけたら	得意	不得意	わからない		
工程や手順を覚える力	得意	不得意	わからない		
清掃用具をあつかう力	得意	不得意	わからない		
この仕事の種類を選んだ理由					
(例) 私は やりがい ・ 必要な力 の視点でこの仕事の種類を選びました。 なぜなら…					

図5 ツール2：適性チェッカー(清掃)

また、学習指導要領の職業科では、A職業生活イ職業(イ)思考力判断力表現力等⑦の解説に、適性の理解について以下のように示している。『「自ら適切な役割を見いだす」とは、作業や実習を通して、自分の能力や適性について理解を深め、自分の得手不得手や作業の特質等を踏まえて適切な役割を選択することである。指導に当たっては、多様な作業の経験を自己評価や他者評価を通して客観的に振り返るとともに、治具や補助具の工夫などによる改善の視点も加えて評価し、主体的に考えることができるようにすることが大切である。この力は、卒業後の進路を選択する視点にもつながるため、思考力、判断力、表現力等の育成を図りつつ、「C産業現場等における実習」の内容へ発展できるように工夫する必要がある。』

このように、指導要領でも自分の得手不得手や作業の特性等を踏まえて自分の役割や進路を選択することの重要性が示されている。

この適性チェッカーは、職場見学の単元の中で活用する。見学先や進路先、実習先となる様々な仕事を12の種類に分け、その仕事への適性を考えるツールとする。

12の仕事の種類とは、「清掃」「農業」「食品加工」「製造」「梱包・販売準備」「洗濯・クリーニング」「運搬」「事務補助」「販売・接客」「介護・保育」「管理職」「専門職」である。この12の仕事の種類は、職場見学の見学先や、卒業生の進路先、在校生の実習先、在校生の進路希望をもとに決定した。

適性チェッカーでは、①「その仕事のやりがい」②「その仕事に特に必要な力」の2項目について自己評価を行う。

「やりがい」についての評価項目は、生徒たちが職場見学で調べてきたものをそのまま反映した。見学先の先輩達が語った仕事のやりがいについて、その考えに共感するかしないかで、その仕事のやりがいに興味をもてるかどうかを評価する。

また、「特に必要な力」についての評価項目は、生徒たちが調べたものを参考にしながら、高等部職員で

検討して決定した。その仕事に必要な力が、自分にとって得意か不得意かを考えることで、その仕事が自分に合っているかどうかを評価する。

「やりがい」の3つの評価項目について、共感できる、共感できないを選び、「特に必要な力」の3つの評価項目について、得意、不得意を選ぶことで、自分の適性を総合的に評価する。

図5は、12の仕事の種類のうち、清掃の仕事の適性チェッカーを例として掲載したものである。

7 ふたつのツールの位置付け

ふたつのツールは、働くことに関する生徒の自己理解を促し、生徒の主体的な進路選択につなげる目的で制作している。ツール1の準備性チェッカーでは、①～⑤の働くために必要な力(職業準備性)についての全体像を捉え、ツール2の適正チェッカーでは、⑤職業適性について焦点を当てて考えられるように設計している。

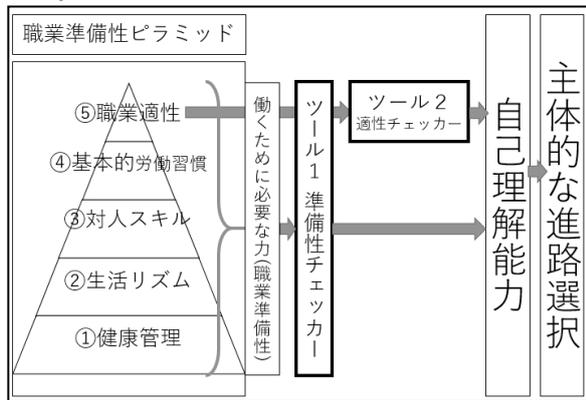


図6 2つのツールの位置付け

III 研究仮説

仮説1

準備性チェッカーを活用することで、「働くために必要な力」についての「自己理解能力」を高めることができる。

仮説2

適性チェッカーを活用することで、「職業適性」についての「自己理解能力」を高めることができる。

仮説3

主体的に進路選択をするために必要な力を「自己理解能力」と仮定し、実践を通して、「自己理解能力」を高めることで、生徒たちの主体的な進路選択に結びつけることができる。

IV 実践

1 方法

(1) 事例児

今回の実践では、高等部1年生を対象に行う。高等部1年生は8名の学級である。本研究では、事例児を

2名上げて結果を検証する。

表1 事例児A, Bの自己理解に関する実態

共通の実態	<ul style="list-style-type: none"> 自分の好き嫌いや興味・関心については理解があり、述べることができる。 自分の得意・不得意や身に付いている力、課題についての理解が浅く、述べるのが難しい。
事例児A	<ul style="list-style-type: none"> 特に自分の健康上の課題についての理解が浅く、体調不良の状態や原因を述べるのが難しい。
事例児B	<ul style="list-style-type: none"> 特に作業場面での適切な自己評価が難しく、できていないことも、できたと評価としてしまうことが多い。

(2) 測定計画

表2 高等部1年職業科と測定の計画

5月	職業科導入 ・将来の夢 ・高等部の進路学習 進路希望調査1回目(ツール2の参考材料)
6月	職業科 ・身の回りの仕事 ・勤労の意義 ・やりたい仕事
7月	校内実習 ・校内実習事前学習 ツール1測定1回目 ・校内実習事後学習 ツール1測定2回目 進路希望調査2回目(ツール2の参考材料)
9月	校内集中作業 ・校内集中作業事後学習 ツール1測定3回目
10月	現場実習
11月	職場見学 ・職場見学事後学習 進路希望調査3回目(ツール2測定1回目)

ツール1の準備性チェッカーは、7月の校内実習の事前学習で1回目、事後学習で2回目、9月の校内集中作業の事後学習で3回目の測定を行う。

働くために必要な力への自己理解について変化を見取るために測定1回目と測定3回目の結果を比較する。

ツール2の適性チェッカーは、11月の職場見学の事後学習に1回目の測定を行う。職業適性については、職場見学を行い、様々な仕事の種類について理解してからでなければ測定が難しいため、この時期に設定した。可能であれば、ツール2の適性チェッカーも継続して使用し、生徒の変容について検証したいところだ

が、高等部1年の職業科の授業は11月を過ぎると3月まで間が空くので、今回は11月までの測定で効果を検証する。

また、ツール2は、自分に適した仕事についての評価を行うため、進路希望や次回の実習の希望について考えるための資料になる。今回は適性の評価を一度しか行うことができないため、比較材料がなく検証が難しい。ツール2によって、生徒の進路希望がどのように変化したのかを検証するために、評価前の進路希望の変遷について、参考材料として提示する。

2 結果

(1) ツール1

① 事例児A

表3 事例児A：測定1回目（2020年7月9日）

①健康管理	<ul style="list-style-type: none"> ・3回以上欠勤・遅刻・早退がある ・決められたときに病院に行かないことが2回以上あった ・決められたときに薬を飲まないことが3回以上あった …等 <p style="text-align: right;">達成率 50%</p>
②生活リズム	<ul style="list-style-type: none"> ・決めた時間に寝ないことが1～2回あった ・買い物は自分でなく家族にしてもらった ・お金の管理は家族にしてもらった …等 <p style="text-align: right;">達成率 60%</p>
③対人スキル	<ul style="list-style-type: none"> ・丁寧な言葉をつかえない ・1対1の指示を聞いて分かる ・時間はかかるが自分から手伝えることができる …等 <p style="text-align: right;">達成率 70%</p>
④基本的労働習慣	<ul style="list-style-type: none"> ・時々、報告、連絡、相談ができないことがある ・時々、正確性に欠けることがある ・時々、集中が切れる ・自分で危険を判断して対処できる …等 <p style="text-align: right;">達成率 80%</p>
⑤職業適性	<ul style="list-style-type: none"> ・得意、苦手な仕事それぞれ1つは分かる ・必要とされる速度に達しない ・支援があれば作業変化に対応できる …等 <p style="text-align: right;">達成率 50%</p>

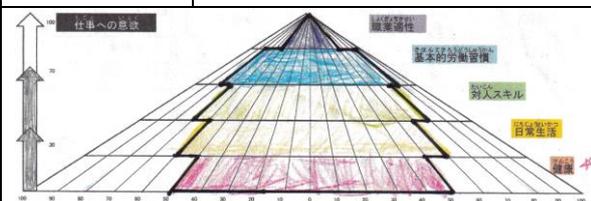
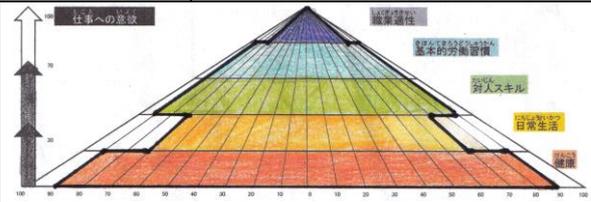


表4 事例児A：測定3回目（2020年9月25日）

①健康管理	<ul style="list-style-type: none"> ・1回も欠勤・遅刻・早退がない ・決められたときに病院へ行った ・決められたときに薬を飲んだ …等 <p style="text-align: right;">達成率 90%</p>
②生活リズム	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日決めた時間に寝た ・買い物は自分でなく家族にもらった ・お金の管理は家族にもらった …等 <p style="text-align: right;">達成率 70%</p>
③対人スキル	<ul style="list-style-type: none"> ・上司に丁寧な言葉をつかえる ・全体指示を聞いて分かる ・すぐに手伝えることができる …等 <p style="text-align: right;">達成率 90%</p>
④基本的労働習慣	<ul style="list-style-type: none"> ・必要に応じて自分から報告、連絡、相談できる ・時々、正確性に欠けることがある ・時間まで集中して仕事を続けられる ・自分で危険を判断して対処できる …等 <p style="text-align: right;">達成率 90%</p>
⑤職業適性	<ul style="list-style-type: none"> ・得意、苦手な仕事それぞれ1つは分かる ・ほぼ必要とされる速度である ・作業変化に対応できる …等 <p style="text-align: right;">達成率 70%</p>



② 事例児B

表5 事例児B：測定1回目（2020年7月9日）

①健康管理	<ul style="list-style-type: none"> ・1回～2回程度欠勤・遅刻・早退がある ・栄養のバランスを考えずに食べている ・決められたときに薬を飲んだ …等 <p style="text-align: right;">達成率 70%</p>
②生活リズム	<ul style="list-style-type: none"> ・決めた時間に寝ないことが3回以上あった ・時間いっぱい働けないことが1～2回あった ・買い物は自分でなく家族にもらった …等 <p style="text-align: right;">達成率 60%</p>
③対人スキル	<ul style="list-style-type: none"> ・1対1の指示を聞いて分かる ・不安や怒りを落ち着けることがで

	<ul style="list-style-type: none"> きない 指示通りに行動できる。 <p>…等 達成率 80%</p>
④ 基本的労働習慣	<ul style="list-style-type: none"> 時々、報告、連絡、相談ができないことがある 時々、正確性に欠けることがある 時々、集中が切れる 言われればルールやマナーを守れる <p>…等 達成率 70%</p>
⑤ 職業適性	<ul style="list-style-type: none"> 得意な仕事、苦手な仕事に分らない 必要とされる速度に達しない 作業変化への対応が難しい <p>…等 達成率 40%</p>

表6 事例児B：測定3回目（2020年9月25日）

① 健康管理	<ul style="list-style-type: none"> 1回も欠勤・遅刻・早退がない 栄養のバランスを考えて食べている 決められたときに薬を飲まないことが1～2回あった <p>…等 達成率 80%</p>
② 生活リズム	<ul style="list-style-type: none"> 毎日決めた時間に寝た 決められた時間いっぱい働くことができた 誰かの支援を受けて買い物ができる <p>…等 達成率 90%</p>
③ 対人スキル	<ul style="list-style-type: none"> 全体指示を聞いて分かる 支援を受けて気持ちを落ち着けることができる 時々指示から外れてしまう <p>…等 達成率 80%</p>
④ 基本的労働習慣	<ul style="list-style-type: none"> 時々、報告、連絡、相談ができないことがある 正確に作業できる 時々、集中が切れる 言われればルールやマナーを守れる <p>…等 達成率 80%</p>
⑤ 職業適性	<ul style="list-style-type: none"> 得意、苦手な仕事がそれぞれ1つは分かる ほぼ必要とされる速度である

	<ul style="list-style-type: none"> 支援があれば、作業変化に対応できる <p>…等 達成率 70%</p>
--	---

(2) ツール2

表7 進路希望調査1回目（ツール2の参考材料）

事例児A	特例子会社での清掃作業
事例児B	漁師

表8 ②進路希望調査2回目（ツール2の参考材料）

事例児A	特例子会社での清掃作業
事例児B	漁師

表9 ③進路希望調査3回目（※ツール2測定1回目の結果）

事例児A	特例子会社での清掃作業
事例児B	スーパーでの食品加工

表10 事例児A 適性チェッカーの測定結果（清掃）

やりがい	
きれいになったとき	共感する
周りの人にありがとうと言われたとき	共感する
ごみがいっぱいとれたとき	共感する
必要な力	
ごみや汚れを見つける力	得意
工程や手順を覚える力	不得意
清掃用具を扱う力	得意
理由	私は必要な力の視点でこの仕事を選びました。ぼくがなぜ清掃にしたかということ、自分にできそうということ、道具をいっぱい覚える力と工程を覚える力をつけたいからです。

表11 事例児B 適性チェッカーの測定結果（食品加工）

やりがい	
お客様に商品が売れるのが嬉しい	共感する
食品をたくさん作れるようになったとき	共感する
お客様から食品加工を頼まれたとき	共感する
必要な力	
衛生管理の力	得意
道具を安全に使う力	わからない

時間内に商品を作る力	得意
理由	私はやりがいの視点でこの仕事を選びました。なぜなら、食品を作っている職人興味があります。注文通りに作れると嬉しいから食品加工に決めました。

IV 考察

1 仮説1（ツール1準備性チェッカー）について

（1）事例児A

①健康管理の達成率が7月から9月にかけて、50%から90%へ大幅に改善されている。本児は、7月の段階では、通院や服薬の管理ができておらず、作業学習の中で体調を崩し、早退や遅刻をすることが何度かあった。1回目の測定の際に、教師と一緒に評価を行いながら、視覚化されたピラミッドを見ることで、健康管理の大切さに気づき、次回に向けて改善を図ったと考えられる。

③対人スキルの達成率も70%から90%に改善されている。7月には言葉遣いや全体指示等の理解に課題があったが、①と同様に9月には改善することができたと考えられる。

以上の変容から、事例児Aは、働くために必要な力への理解と、自分に身に付いている力、課題となっている力への理解を深め、適切な自己理解に近づくことができたと言える。

（2）事例児B

①健康管理の遅刻・早退・欠席の状況や栄養バランスについては評価が上がっているが、服薬については評価が下がっている。①健康管理全体としては70%から80%に改善されており、できたこととできなかったことを適切に評価しながら、努力している様子が伺える。

②生活リズムについては、60%から90%に大きく改善されている。就寝時刻、時間いっぱい働くための体力、必要な道具等の買い物などについての評価が上がった。実際の生活場面でも、就寝時刻が遅かった7月には午後の授業での居眠りがあったが、就寝時刻に気を付けた9月以降は午後の授業への取り組みも改善されていた。

⑤職業適性についても、40%から70%へ大きく改善されている。自分の得意な仕事や苦手な仕事への意識が高まり、作業速度や変化への対応についても評価が上がったものと考えられる。

以上の変容から、事例児Bも、働くために必要な力への理解と、自分に身に付いている力、課題となっている力への理解を深め、適切な自己理解に近づくことができたと言える。

（3）ツール1（準備性チェッカー）について

職業準備性ピラミッドを活用し、自分の達成度を視覚化することで、今の自分の力や、課題となっている

力についての理解を深めることができたと言える。

色鉛筆で塗ったものを見ると、7月から9月にかけて、①健康管理や②生活リズムの段階が特に充実し、ピラミッドとして安定感が増したことが一目で分かる。

知的障害の児童生徒の学び方の特徴として、学んだことが断片的になりやすいということが挙げられるが、その点では、このピラミッドを活用することで、必要な力の全体像を一目で把握し、評価できることがこのツールの利点であると考えられる。

ただ、このツール1（準備性チェッカー）だけでは、主体的な進路選択に結び付けることは難しい。⑤職業適性には、自分の得意な仕事、苦手な仕事への評価項目が1つだけしかない。自分の得意な仕事を生かせる職業は何か、自分が興味をもって働ける職業は何か、適性についてより幅広く深く評価するためのツール2が重要であることも確認できた。

2 仮説2（ツール2適性チェッカー）について

（1）事例児A

事例児Aは5月、7月、11月の3回とも「特例子会社での清掃作業」を選んでいる。選んだ仕事の種類に変容は現れなかったものの、選んだ理由から自己理解の深まりを読み取ることができる。

5月、7月段階で清掃の仕事を選んだ理由は、「1度見学をしたことがあるから。」というものだった。

11月段階の理由は、「自分にできそうと言うことと…」と今の自分に身に付いている力と、その仕事に必要な力を関係付けて捉えている。また、「道具をいっぱい覚える力と工程を覚える力をつけたいからです。」と自分に足りない力について、今後努力して改善する意欲をもつことができた。

このことから、事例児Aについては、職業適性に関する自己理解が高まり、自分の進路実現のために、今後の自分の行動について考えることができたと言える。

（2）事例児B

事例児Bは5月、7月は漁師になりたいと話していたが、11月には食品加工の仕事を選んでいる。選んだ理由は、「職人に興味があり、注文通りに作れると嬉しいから…」と自分のやりがいと関係付けて捉えている。漁師については、学習の中で、小型船舶操縦士免許や、海上特殊無線免許が必要であることが分かり、高等部在学中には取得が難しいものと判断していた。

また、その後の生活の中で、「食品加工の仕事のために、道具を安全に使えるようになりたい。」と発言することもあり、仕事と自分の関係性について考える姿を見ることができた。

以上のことから、事例児Bも職業適性への自己理解が深まり、自分なりの理由をもって仕事を選ぶことができたと言える。

（3）ツール2（適性チェッカー）について

2人の事例児の変容から考察すると、職場見学という単元と適性チェッカーの使用によって、職業適性についての自己理解が高まったと考えられる。特に、自分がその仕事を選んだ理由を、やりがいと特に必要な力の視点に沿って言語化できたことが成果だったと言える。

生徒によって、必要な力から仕事を選ぶ場合とやりがいから選ぶ場合があったが、やりがいに関する2人の記述には、「自分が掃除をした場所がきれいになると達成感がでる。」「ありがとうと言われると、やってよかったと思う。」「ごみがいっぱいおけると爽やかな気持ちになる。」や、「お客様が僕が作った食品を買うと気持ちがテンションが上がります。」(原文そのまま)「頼まれたとき食品を注文通りに作れると嬉しいです。」と実感のこもった言葉が沢山見られた。

この記述を読むと、生徒達は、「やりがい」を重視して進路選択をしていることが分かる。

職業適性について考える時には、単に得意・不得意や必要な力が身に付いているかだけでなく、今後の自分の成長を踏まえて、やりがいや勤労の意義、自己実現の視点を含めて評価する必要があると分かった。

また、12の仕事の種類のうち、「専門職」については、バス運転手や漁師、看護師など、高等部在学中には必要な資格や免許の取得が難しい職業が該当する。1年生の中には、必要な資格への理解が浅く、希望する生徒も多くいたが、この単元の中で学習し、より身近な仕事を選ぶようになったことも一つの成果と言える。

3 仮説3 (自己理解能力と進路選択)について

仮説1 (準備性チェッカー)と仮説2 (適性チェッカー)のふたつの実践を通して、働くために必要な力(職業準備性)や、職業適性に注目して自己理解能力を高めることができた。特に、これまでは自己理解、自己評価の視点が定まらなかった生徒たちに、視点を持たせることができたことが大きい。ルーブリック評価を取り入れることで、できる・できないと評価する理由や、得意、不得意を選ぶ理由をそれぞれの評価基準に沿って自分なりに考えられるようになった。

進路選択については、自分の得意、不得意といった適性から選ぶ場合と、やりがいから選ぶ場合があった。

選ぶ理由はそれぞれであるが、自分なりの理由をもって選べたことは、今後の主体的な進路選択につながっていくものと思われる。

このようなことから、主体的な進路選択に必要な地力として、「自己理解能力」を設定したことは妥当だったと考えられる。

しかし、自己理解能力が高まるだけでは、主体的な進路選択が達成できないことも分かった。適切な進路選択には、自己理解だけではなく、様々な職業への理

解や、勤労の意義への理解なども重要だと言える。指導要領では、「適切な勤労観や職業観を育むこと」と示されている。自己理解能力以外の力についても、研究が必要だと考えた。

4 見えてきた課題

(1) 準備性チェッカーの改良

ツール1(準備性チェッカー)だけでは、それぞれの評価項目を正確に評価することは難しいことが分かった。評価基準に沿って正確に自己評価をするためには、作業学習の日記等のツールで、日々の取り組みについての評価を積み重ね、この準備性チェッカーの評価に結びつけることが重要だと分かった。特に、記憶について課題をもつことが多い知的障害児については、記憶ではなく、記録を活用することで支援を行うことが有効であると考えられる。作業日記の項目と、準備性チェッカーの項目を見比べ、さらに改良を図る必要があると考えた。

また、実践を行う中で、職業準備性以外の課題をもつ生徒もいる事が分かった。信頼できる大人との関係性や愛着形成などの課題についても評価できるツールも必要ではないかと考えている。

(2) カリキュラムマネジメントの視点より

本校高等部では、現在、職業科を柱としてカリキュラムマネジメントを行っており、高等部3年間の進路指導の流れについて、グランドデザインを作成して整理している。今回、開発したふたつのツールは、ツール単独ではなく、3年間の計画的な指導体制のものの活用している。ツール1は校内実習の事前事後学習や現場実習の事前学習、ツール2の職場見学の際に活用した。

今後は、ふたつのツールの活用場面についてもグランドデザインの中に盛り込み、3年間の計画の中でより効果的に、支援を行うようにしたいと考えた。

また、本校では、「準備性チェッカー」や「適性チェッカー」以外にも、図7に示す「富士山シート」というツールを使い、将来と今を結び付けて考える授業を行っている。



図7 富士山シート

「富士山シート」は、PATHの手法をヒントに高等部で作成したもので、PATHの「本人の希望に沿ってゴールを設定し、ゴールを達成するための作戦を立てる」という考え方を引き継ぎながら、「必要な人（支援者）」の項目を除き、今の姿や将来の姿を時間軸に沿って考えるためのツールになっている。自分の理想の将来像と今の自分を対比的に捉えることで、その間のギャップを埋めるために、日々の生活目標を決めて、日々の生活で自ら学びに向かう姿を引き出すことを狙っている。

自己理解を支援するツール1、ツール2以外にも、将来設計を支援する「富士山シート」も活用し、実践を広げていくことで、本校の取り組みをさらに発展させられるのではないかと考えている。

（3）他者評価と他者理解

今回はツールの活用に焦点を当てて自己理解を深めたが、実践を行う中で、自己評価と自己理解を促すためには、適切な他者評価や他者理解が必要であることが分かった。ツール1は働くために必要な力について自己評価と教師による他者評価をすり合わせるプロセスがあり、また、周りの友達の様子を見て、他者理解をし、自分と他者を比較することで、よりの確に自己理解が深める場面もあった。

図8に示すように、自己理解は他者との関係性の中でより深く育まれるものであると考える。

今後は、こうした視点のもと、実践を重ねて自己理解についてより一層迫っていきたいと考える。

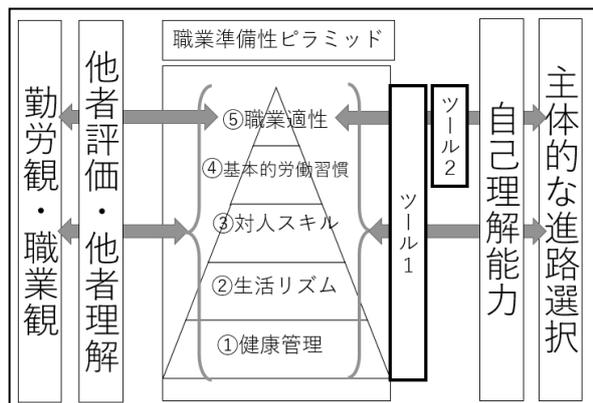


図8 職業に関する自己理解モデル

参考・引用文献

- 文部科学省（2019）卒業者の進路状況（平成30年3月卒業生）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubett/013.htm
- 才藤大和・古井克憲（2018）「知的障害特別支援学校高等部における 作業学習・現場実習・進路指導に関する実態調査」
<http://repository.center.wakayama-u.ac.jp/files/public/0/3485/20190222102437169409/AN00257966.69.13.pdf>
- 文部科学省（2019）特別支援学校学習指導要領解説 知的障害者教科等編（下）（高等部）
https://www.mext.go.jp/content/20200325-mxt_tokubetu01-1386427_6.pdf
- 独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構（2020）就業支援ハンドブック実践編 アセスメントとプランニング
<https://www.jeed.go.jp/disability/data/handbook/handbook2/html5.html#page=1>
- 静岡大学教育学部附属特別支援学校（2013）特別支援教育のコツ 今、知りたい！ かかわる力・調整する力 ジアース教育新社
- 文部科学省（2018）キャリア教育の推進
https://www.mext.go.jp/apollon/mod/pdf/mext_propulsion_20180223.pdf